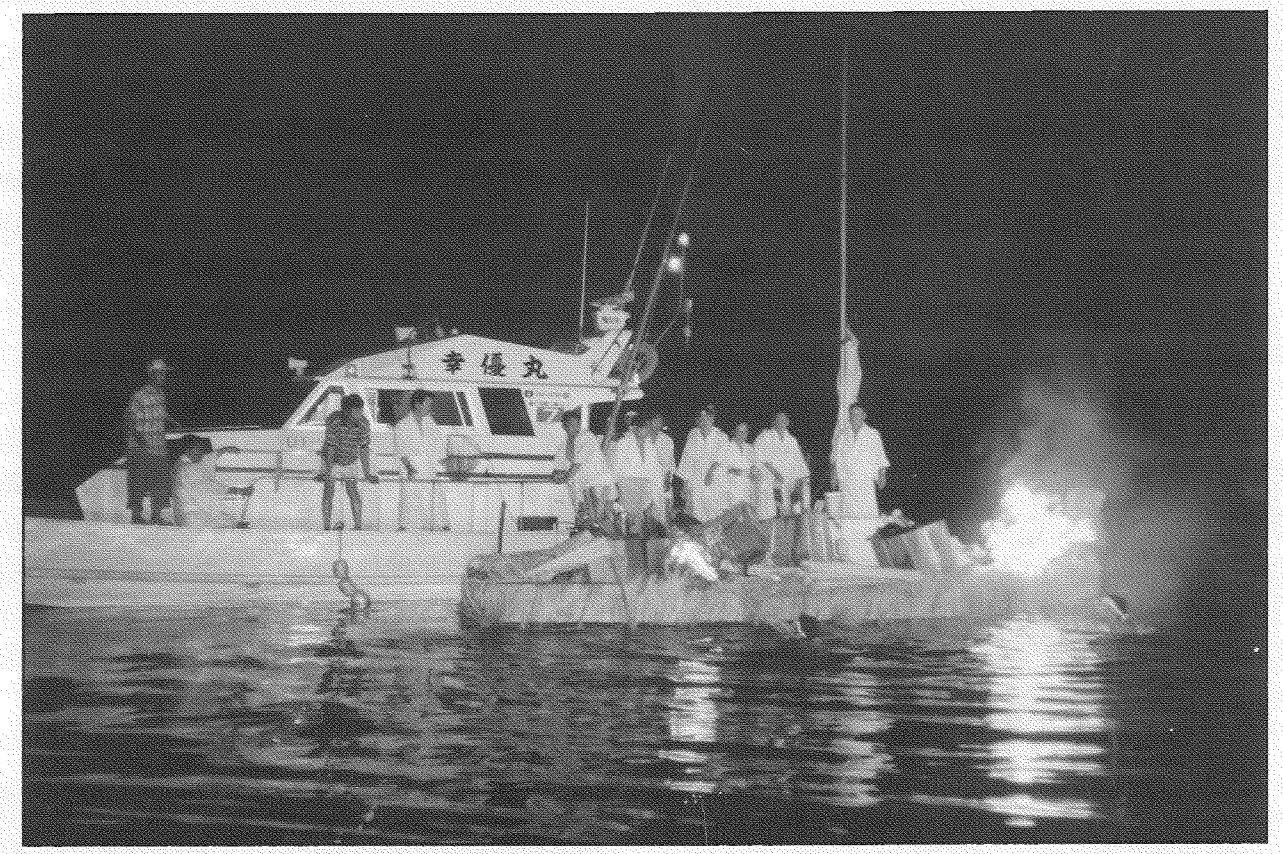
べっぷの文化財

No.28
平成9年3月

ー海門寺の施餓鬼会と精霊流しー



別府市教育委員会

海門寺のお施餓鬼と精霊流し

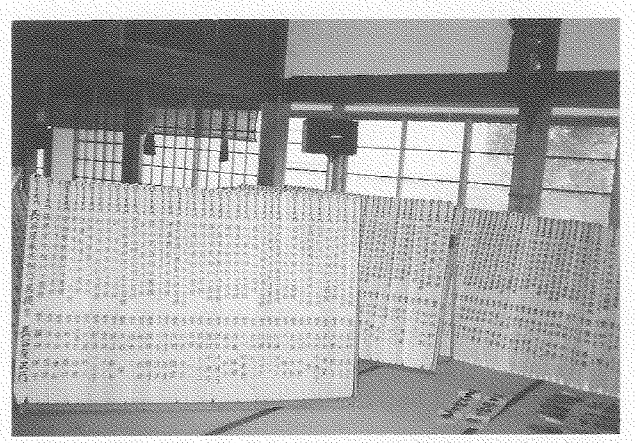
1　行事の沿革

明治41年(1908)に記された『海門寺由来記』によると、当寺は建長3年(1251)の創建で、久光山海門寺と称していたが、慶長2年(1597)の鶴見岳爆裂の際に、洪水によって久光島が海中に没したので廃絶していた。その後、元禄年間(1688－1704)に入って雷洲禅師が府内より巡錫し、別府・浜脇・田の口・朝見・立石・鶴見・石垣の7ヶ村の窮状を憐れんで、本尊の延命地蔵願王大菩薩に祈誓すると、五穀豊熟の霊験を得た。村民は雷洲禅師のために堂宇を建立し、7ヶ村の永代祈願所とした。そこで雷洲禅師は久光山海門寺の再興を志して、曹洞宗大本山永平寺の直末寺となり、宝生山海門寺と号したという。

ところで『海門寺由来記』には「殊に旧七月十六日は瓜生、久光両島陥没の際一千余戸の溺死者及び石垣原戦死者七ヶ村先亡精霊等の幽魂を追弔するためには大施餓鬼会を執行するの定例となしぬ」と記すが、精霊流し(流れ灌頂)についての記載はみられない。寺伝では大施餓鬼会とともに元禄年間(1688－1703)より始まったとされているが、享和2年(1802)に、火災に遇い再建しているので、法会にも盛衰があったことが伺えるのである。まして、精霊流しは別府地域の盆の民俗行事として40年前の朝見川や境川などの河口で行われていたものであった。真宗門徒以外の仏教諸宗の家々では、盆の16日の夕方になると、板や麦稈(ムッカラ)で作った約1メートルの舟に、盆の供物を載せて流す習俗が残っていた。これを寺院の主導で僧侶が行えば「流れ灌頂」であるが、海門寺の流れ灌頂が始められた時期を示した史料は確認されていない。

2　行事の準備

海門寺の大施餓鬼会と精霊流しは、旧暦7月16日に催されていたが、盆行事が月遅れの8月に行われるようになってから、8月16日に修するようになった。行事は海門寺が主催するが、実務は総代と檀家の有志者が担当している。行事の総務進行は総代と住職が担当し、会場作りと精霊船作りは檀家の有志・年配者、船の引き手(行衆12人)は檀家の若者から選ばれる。経木塔婆(卒塔婆)の申し込みは、当日前に寺で受け付け看板屋に発注しているが、例年1,000本近くに達するという。海門寺の檀家は約80戸と聞くので、信徒による供養依頼の多いのが伺える。板の大塔婆には故人の戒名や先祖代々菩提と記した下に供養者の氏名を墨書してある。

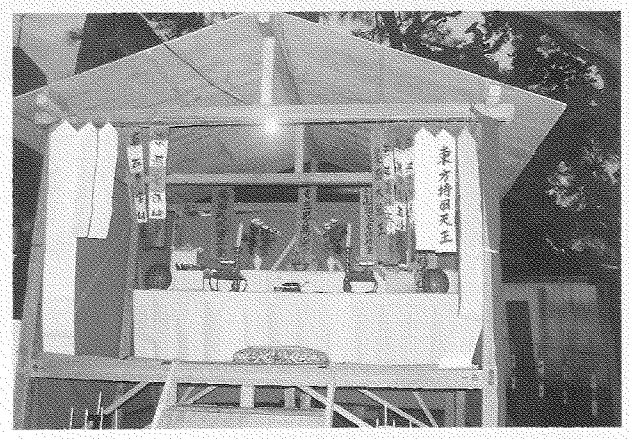


大塔婆

また、本堂内陣の本尊前に臨時に設ける施餓鬼棚と山庭に臨時に組み立てる山門施餓鬼棚を飾る仏名を墨書した短冊を準備する。白紙の短冊には「東方持国天王」「西方広目天王」「南方・増長天王」「北方多聞天王」と4枚に書く。赤色の短冊には「集面大鬼王」(1枚)、緑黄赤白紫の五色の短冊6枚には「南無甘露王如来」「南無広博身如来」など6如来名を書き、それぞれの短冊の上部には小紐を付けてある。他に前面に吊す大きな短冊2枚にも経文を記しておく。

さらに、参道の両側と山庭(境内)に張った2本の綱には、約80センチメートル間隔で経文を書いた五色の短冊を吊り下げる。250枚の短冊は山門施餓鬼会が終ってから、参会者が競って持ち帰る。これを畑に吊して虫除けとしたり、財布に入れて財運の呪符にすると霊験を得ると言い伝えられているからである。

さらにまた、施餓鬼棚の祭壇に安置する4枚の位

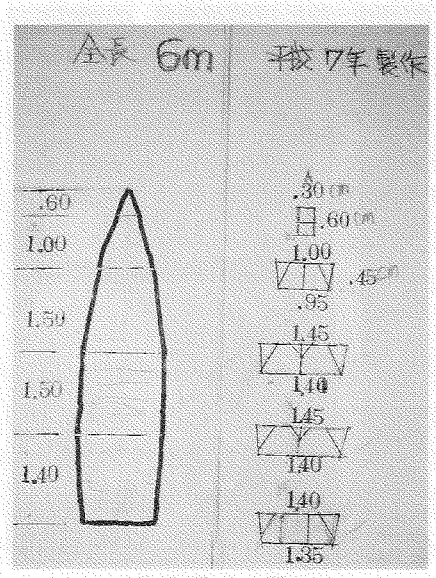


山庭の精霊棚の飾り

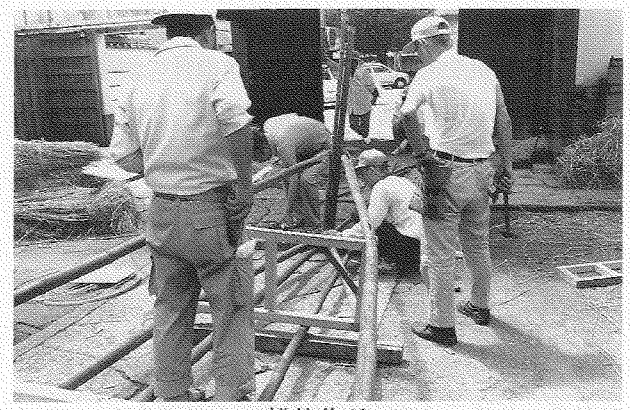
牌を持ち出しておく。位牌にはそれぞれ「三界萬霊」「瓜生嶋・久光嶋溺死者諸精霊」「鉄道轢死者諸精霊位」「萬国戦死諸英霊」と墨書されている。

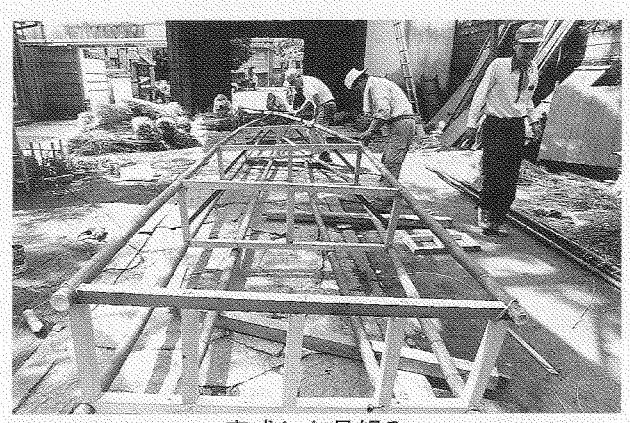
最後に、精霊船の製作について記しておきたい。今年は16日の朝9時より船を作り始めて、完成したのは午後3時過ぎであった。例年のとおり檀家の手馴れた経験者が集り、5～6名で作っているという。製作責任者の小野清三郎氏によると、10年程前までは、船の枠組みを全て竹で作っていたが、船の形態が良くなかった。そこで、船尾のトモ（艫）と胴の間の中仕切りに、木製の枠を使うことにした。写真の設計図は平成7年に作った船体の枠を示してあるが、左の図は木枠を設置する位置を、右の図は木枠の形と寸法を図示したものである。これに従って作られた5個の木製枠を所定の位置に立て並べ、2本の男竹（真竹）をトモ（船尾）からミヨシ（船首）に向けて湾曲させて舷とする。船底は平底に作るので5本の男竹をトモからミヨシに渡し、両端の男竹を湾曲させてミヨシで折り曲げておく。上部のフナベリ（舷）と同じ構造であるが、底部は狭くなる。木枠を立てて、針金で男竹を固定すれば船体の骨組みは完了する。

次に、麦稈を舷側に立て並べるが、ムッカラの元を下にして、穂先を舷の内側に折り曲げ、内と外から割竹で押える。2本の内外の割竹を約50センチ間隔で、縄を通して結び締めておく。押え竹は上下2段とし、船尾のトモにも麦稈を並べて囲いを作る。フナベリは、麦稈を横に並べて、巻きたてて太くし、ミヨシ（舳）も竹を芯にして、麦稈を巻きたてて太く作り形を整える。船底には麦稈を束ねて敷き詰め、割竹で押さえて海上に浮き易く、燃え易いようにしておく。

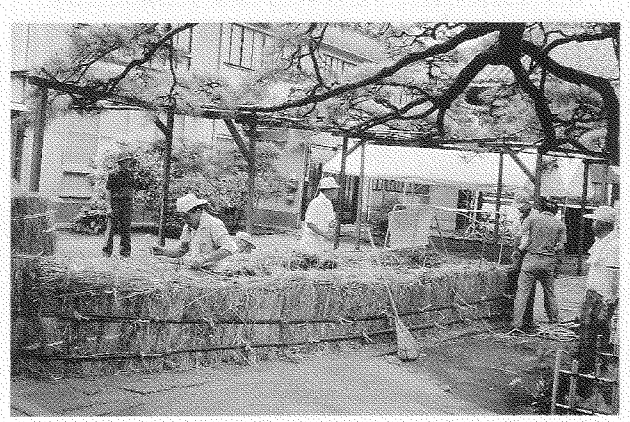


小野清三郎氏作図


船体作り

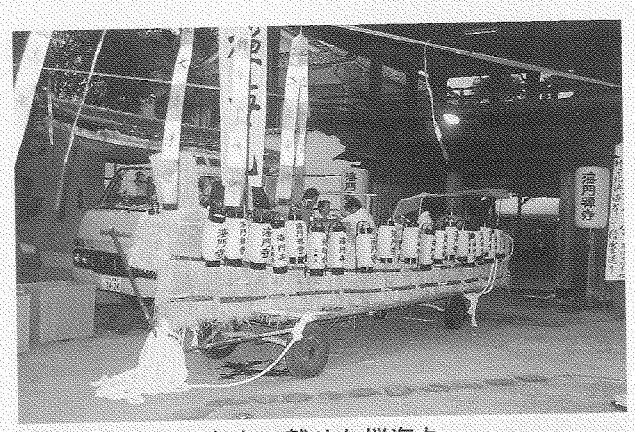

完成した骨組み

舷側を編む


完成した麦稈

精霊船が完成すれば、台車に載せ中央に「禅海丸」と大書した帆を立て、ミヨシに白布の善の綱を結び付けて引き綱とする。夜になって精霊流しに出発する際には、海門寺と書いた提燈を船端の左右に16個ずつ吊して飾りとしている。ずっと以前には檀信徒が持参した盆の供物と大施餓鬼会で供養した板塔婆を積み込んでいたというが、現在は港までトラックで運んでいるので、精霊船を引くのが楽になったようである。

なお、山門の楼上に保管してある精霊棚の木材をおろして、正面を本堂に向けて組み立てておく。



台車に載せた禅海丸

3　行事の内容

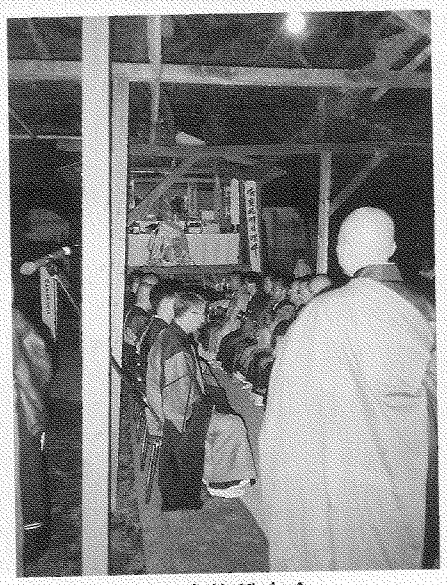
「海門寺の精霊流し」は3部構成で実施されている。すなわち①盂蘭盆大施餓鬼会　②山門大施餓鬼　③大精霊流しから成って居り、前2者は海門寺の法会である。民間でいうオセガケ(お施餓鬼)行事であるが、僧侶による施餓鬼法会の色彩が強い仏教行事である。後者の精霊流しは寺院の側からは、流れ灌頂と呼ぶ儀式であるが、檀家の若者(行衆)の役割が重くなるので、民俗行事としての色彩が濃くなり、精霊流しと呼ぶにふさわしい火祭りがクライマックスとなっている。

①盂蘭盆大施餓鬼会は、初盆家を主対象とした行事であるが、先祖供養を依頼した人々も一般参列者として、本堂左側の僧侶の後部席(入堂出来ない一般参列者は山庭に設けたテント席)に着座する。初盆家の人々は本堂右側に着座する。内陣本尊(延命地蔵)の正面外陣に参列した約20名の僧侶が、約10名ずつ向い合って着座し、導師は中央に着座して差定(次第)が進められる。

初盆会の差定は「殿鐘三会」「七下鐘」ここで大導師が上殿する。「鼓鈸三通」(太鼓と鈸を交互に3度打つ)「拈香法語」(焼香して死者に哀悼の意を表すること)「読経」ここで僧侶たちが順に席を立ち、介助の行衆から渡される大塔婆を5～6本ずつ捧持して、本尊に供養する。供養が済んだ大塔婆は行衆が受け取って本堂より持ち出し、山門外に準備してある精霊船に積み込む。(精霊船が重くなるのでトラックに載せる)大塔婆供養が進行する間は、大導師が読経を続ける。次に「回向」「鼓鈸三通」で終了する。いうまでもなく、「回向」は法会の終りに死者の成仏を祈ることである。

続いて②山門大施餓鬼に移る。差定によると「瓜生島、久光島竝元禄年来定例無縁供」と記すが、本堂に向けて山門前に設けられた施餓鬼棚の正面には、「瓜生嶋・久光嶋溺死者諸精霊」「鉄道轢死者諸精霊位」「萬国戦死諸英霊」および「三界萬霊」と書かれた4本の経木塔婆が立てられている。『海門寺由来記』に記す「石垣原戦死者」「七ヶ村先亡精霊」は「三界萬霊」の塔婆に含まれているのであろう。

供養の済んだ大塔婆を船へ



山門大施餓鬼会

さて、山門施餓鬼法会の差定（次第）は「小鐘一会」「大導師入室」「鼓鈸三通」「拈香法語」「読経」（経木塔婆供養）「回向」「鼓鉢三通」の順に進められる。この間、約20名の僧侶は椅子にかけて施餓鬼棚の前の通路で対座したままである。

終了すれば直ぐに精霊流しとなる。今年は午後８時40分ごろ海門寺を出発した。台車に載せた麦稈の精霊船を、白装束の行衆（檀家の若い衆）約12名と初盆家の人々が白布（善の綱）で引いて行く。初盆家の人々は片手に海門寺の提燈を持っているので、提燈行列となる。先頭は海門寺の住職と太鼓・鈸・鉦を持つ３人の僧侶である。道順は海門寺公園の角から駅前通りを経て、北浜より10号線を大分市方向に進み、埋め立て地外の楠港に着く。

駅前通りを行く行列

ここで禅海丸を漁船に積み、トラックで運んだ板塔婆と供物なども積み込む。行衆は禅海丸を積んだ漁船に乗り、僧侶４名は別の船に乗る。初盆家と檀信徒の希望者もそれぞれ別々の船に乗る。午後９時20分出港して、約10隻の船が列を作り、高崎山下の久光島が沈んだと言われる海上に達する。この間に精霊船を積んだ船より、火を点けた板を海中に投げて燈籠流しを演出し、船より花火を打ち上げて堤防で見送る人々に船の位置を知らせる。目的の海上（楠港から東南約５キロメートル）で、精霊船を海に降ろし、供物と板塔婆を積み込んで油を注ぎ点火したのが午後９時50分。行衆が２人海に飛び込んで燃える精霊船を本船より引き離すと、僧侶の乗った船をはじめ、同行の船が「禅海丸」の周囲を航行しながら読経し、燃え尽きて沈むのを見送った。

海上で燃える精霊船

４　永続させたい民俗行事

例年行われている施餓鬼法会と精霊流しは、毎年同じ法式と行事を繰り返すことによって、伝統に重みを加えてきた。しかし社会情勢の変遷に応じて檀信徒の行事への参加には変化が生じてくる。僧侶の法会は差定どおりに執行されるが、精霊流し（流れ灌頂）は徐々に変りつあるようで、今年は海上保安部から海を汚さぬようにとのクレームがついたという。海上で供物や板の塔婆を満載した麦稈製の精霊船を、完全に燃やすには、石油を注ぐなどの工夫を要するようになったのである。一方、精霊船からは海中に花火を投じて、送り火の雰囲気を盛り上げる工夫がなされていた。三百年来の伝統行事といっても、長い間に行事への付加と省略が繰り返されているのを見逃してはなるまい。

そこで、近々10年前の海門寺山門施餓鬼法会と精霊流しの状況を振り返ってみよう。写真の新聞記事は、昭和61年８月18日付けの今日新聞の切抜きである。この年の法会の導師を勤めた海門寺住職長山憲弘師の「謝辞」を引用させていただき、当時の法会と行事の次第を推測してみたい。

昭和61年８月18日

別府市宝生山海門禅寺住持拝白

各位皆々様

元禄年来の定例無縁供養有縁総回向、拙寺山門大施餓鬼会精霊流し法筵は、８月16日午後７時半より本堂にて、市内各宗寺院30余名随喜のもとに、初盆精霊各家供養並びに大塔婆附施餓鬼法要を営み、次いで山庭施餓鬼壇にて、久光島瓜生島諸霊無縁仏小塔婆の施餓鬼を修して後、四間半（８米）の大精霊舟禅海丸は卒塔婆ご供物を満載して出門。詠歌、善の綱白布に引かれてゆく壇信徒・参詣者群200有余人、寺僧先導の行列は北浜海岸旧桟橋波止場に出でて、大精霊舟は10艘のお伴舟共ども高崎山沖合に舟出して、海面に下され、若い行衆12人のたいまつ点火に始まる流灌頂は、乗舟者一同の心経、太鼓の読経の中に、火祭りの精霊送りを円成しました。

ここに初盆供養施主家のご厚志並びに御仏前ご回向等の御寄進を拝謝申し上げ、またご加勢お世話下されし方々、お手伝いの各ご一同様のご協力ご支援を御礼申し述べます。　　合　掌

今日新聞　昭和61年8月18日

お盆送り火

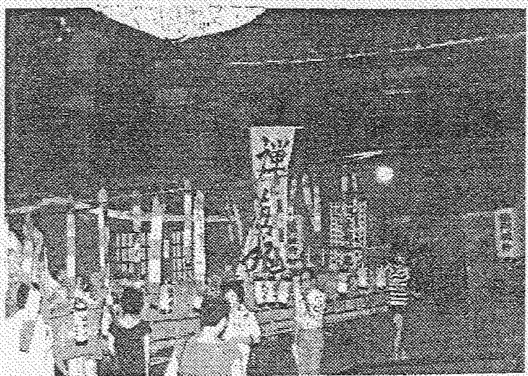
〝三百年の伝統そのまま〟

久光島海没地点で流灌頂

十六日（土）は〝お盆の送り火〟。マイカー帰省のUターンが街の騒音をかきたてる中、北浜二、海門禅寺（長山憲弘住職）では同夜、三百年昔の元禄時代からつづく大施餓鬼法要につづき流灌頂が行われた。

午後七時半からの法要は、本堂に初盆家庭の約七十人が集まり、山庭にも二百人の信徒がつめかけるなか、観音経を読む宗派の僧侶二十五人による読経で始まった。大卒塔婆の霊位が読みあげられての大施餓鬼は舞台を山庭の精霊棚に移し、慶長元年（一五九六）海没した久光・爪生両島の被災者、無縁仏の供養が行われ、寺開創以来の伝統の行事を閉じた。

このあと、麦ワラで、こしらえた大精霊船「禅海丸」は檀信徒の握る白布のヒモにひかれて北浜海岸旧桟橋突堤に向かい、午後九時十隻の漁船に乗り込んだ初盆家族ら二百人が船出。高崎山沖合の久光島海没地点で供物を満載した精霊船に火を放ち、流灌頂を行い、信者は祖霊のめい福を祈り一時間にわたる〝炎の祭典〟に新涼をしみじみ味わった。



〝お盆の送り火〟で信者を迎える精霊船

新聞記事

お施餓鬼は浄土真宗以外の仏教諸宗派で催される法会であるが、別府市域では朝見川尻の砂浜で、盆の17日に僧侶を多く招いて盛大に行なっていた。精霊流しは家ごとに盆の供物を、麦稈で作った小さな舟に乗せて流していたという。南石垣の宝泉寺（臨済宗妙心寺派）でも８月17日の昼に行っている。お斉（会食）の準備から後片付けまで、すべての仕事は講組の人々が当番制で担当している。参会者は原則として檀家のみで、米二合を拠出する。野菜や調味料などは当番の組が担当することになっている。40年ほど前までは、北石垣でも南石垣地区でも、盆の16日に精霊流しをしていた。この行事は、麦稈で作った小さな舟に、盆の期間中仏壇に供えておいた物を納めて流すことで、地区の下の方の家は海に、上の方の家々では川に流すのが常であったという。しかし、海門寺で行なわれているような、規模の大きい精霊流しは、別府市域内では伝わっていない。

ところで、上述のようなお施餓鬼行事はそれほど珍しくはないが、精霊流しは小麦稈が入手し難くなったことと、河川・海を汚すという理由で廃絶した所が多い。別府市の近くでは、大分川流域に点々と残って珍しがられているが、大分市田の浦にも類似の行事が残っているので紹介しておこう。

〈参考資料１〉田の浦地区の精霊流し

大分市田の浦地区では、毎年８月16日に精霊流しが行われる。地区の人達が海岸に集まり、「極楽丸」と呼ぶ精霊船を海に流すのである。20人ほどの地区役員が、麦稈を材料にして全長約５メートルの御施餓鬼（精霊船）を作る。高さ５メートルほどの帆柱を立て、「南無阿弥陀仏」と記した帆を張る。船内には、初盆家庭から持ち寄られた盆提灯や線香、それに西瓜などの果物や酒などをぎっしり供える。

日没後、浜に置かれた精霊船の前で読経を行ってから、船を海に浮べる。10人ほどの若者たちが泳いで船を沖に送り出す。200人近くの地区の人達が精霊船を静かに見送る。岸に戻って来た若者たちは、送り火として、麦稈を束ねたマンドウロウ（万灯籠）を振る。その後、近くの神崎小学校の校庭で供養踊りが行われる。

この田の浦地区の精霊流しは、戦時中に一時中断したが、約150年の歴史があると伝えている。

（大分県立宇佐風土記　歴史民俗資料館報告書第16集『大分県の祭礼行事』（P142））

参考文献：「海門寺の精霊流し」については上記報告書所収の永野康洋氏の報告を参照した。

なお、今日新聞社の小野記者に写真の一部を提供して戴いたので、記して謝意を表する。

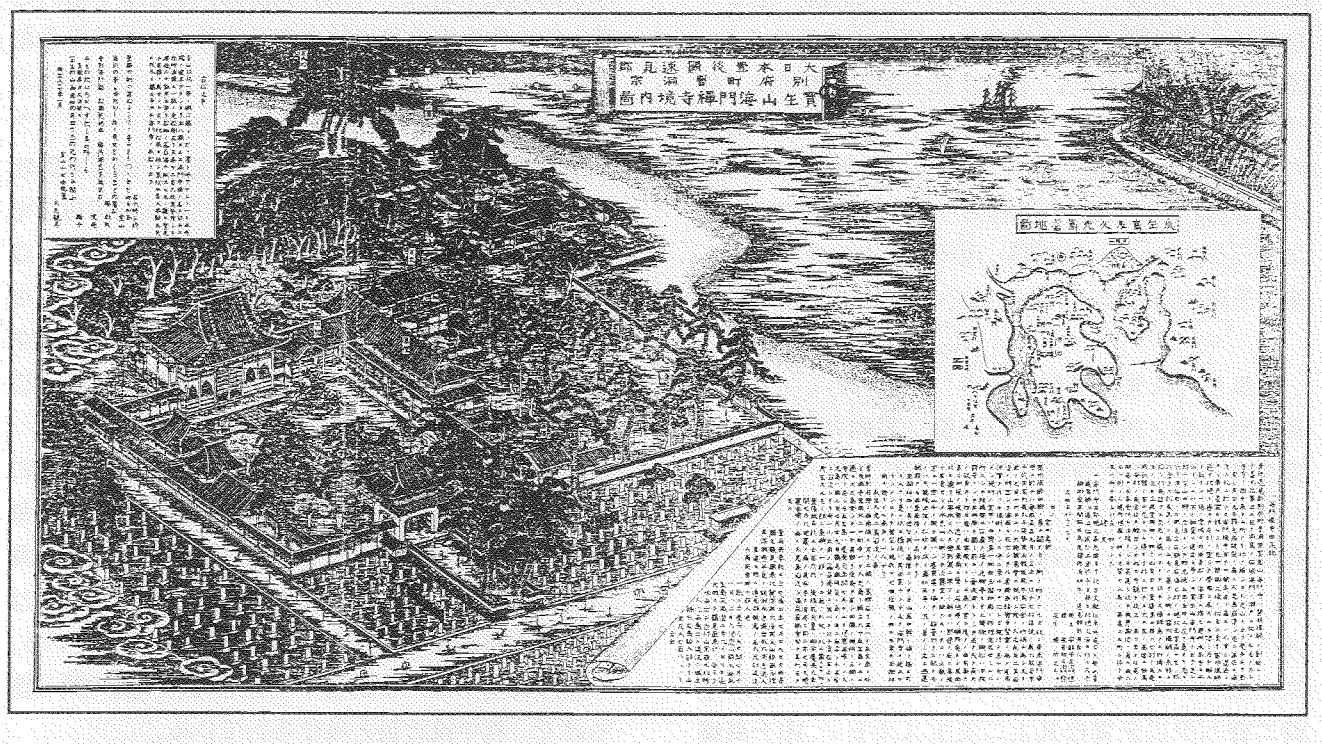
〈参考資料２〉

別府町曹洞宗

寶生山海門禅寺境内図

大日本帝国大分県社寺名勝図録

明治37年3月21日
発行者　上田延成
発行所　修翠館



豊後速見郡別府村曹洞宗宝生山海門寺ハ慧明禅師ノ創始ニシテ、旧久光島上ニ在リ。同島位地海門ノ瀬戸ニ拠メルモノ乃チ寺号ノ因テ来タル所ナリ。初メ称シテ久光山ト云フ。慶長二丁酉ノ年七月廿九日鶴見嶽破裂ノ為メ、久光島崩壊シ遂ニ海底ニ滔没ス。此ニ於テカ海門禅寺亦タ一朝烏有ト為ルノ不幸ニ遭遇シタリ。爾来星霜ヲ経ルコト九十餘回元禄ノ初年ニ至リ、雷州禅師遇々此地ヲ過キテ名刹ノ空シク廃滅ニ属スルヲ惜ミ、乃チ郷人ト議リテ一場ノ霊域ヲ白沙青松ノ海濱ニ擇ヒ、越州永平寺ヲ本山トシテ一宇ノ伽藍ヲ建立シ号シテ宝生山海門寺ト云フ。是レ即チ当山中興ノ元祖ニシテ、時元禄五年壬申ニ在リ是ヨリ先キ別府・濱脇・田の口・朝見・立石・鶴見・石垣七村ノ地、此年害虫ヲ生シ穀物作登ラズ村民為メニ困シムモノ甚ダシ、時ニ雷州禅師ノ来錫ニ接シ村民請フニ災厄禳ンコトヲ以テス。禅師為メニ祈祷スルモノ三日三夜、霊験神ノ如ク凶年去リ豊穣至ル。因テ七村ノ民連歳飢饉ノ苦ヲ免カルヲ得タリ。此ニ於テカ大ニ其ノ高徳ヲ欽慕シ、各村ノ民金材ヲ醵出シテ此ニ寺観ヲ設立シ、且ツ年々収穫ノ期毎戸米麦壱升ヲ法粮トシテ寄進シ、以テ報恩謝徳ノ義ヲ表スルヲ例トス。境内地蔵ノ如キモ皆ナ人民ノ寄進スル所ニ係リ今其一例ヲ挙レバ左ノ如シトス。

證文

一海門寺古跡地之事先祖ヨリ此方支配仕来候處　亡父母為菩提尊師エ進上仕候　然上者於子々孫々此地之儀ニ付少茂子細御座有間敷候　為後證仍而如件

元禄五壬申二月九日

速見郡別府住人

施主　安部孫左衛門㊞

證人　佐藤助左衛門㊞

庄屋　堀　　助之丞㊞

拝上　雷州禅師

雷州禅師中興ノ基ヲ開クモノ斯ノ如クナルガ故ニ、爾来海門禅寺ニ於テハ毎歳正・五・九月ノ三次ヲ以テ七村信徒ノ為大般若會ヲ修メ、其家内長久子孫繁栄五穀成就牛馬安全ノ祈祷ヲ為シ、又タ歳ノ七月十六日ニハ大施餓鬼會ヲ執行シ、彼ノ久光瓜生ニ島滔没ノ時空シク海底ニ死亡シタル有縁無縁幾多精霊ノ為メ、追吊法會ヲ行フテ恒例トシテ今ニ至ルマデ之レガ執行ヲ怠ルモノナシ。現時ノ堂宇ハ中興第十四世玉潤和尚ノ修理完成セシムル所ニシテ結構頗ル荘厳ヲ極メ、老幹亭々タル幾株ノ磯松ハ深緑欝葎トシテ其四周ヲ囲ミ、前ニハ蒼波渺々トシテ遠ク天ヲ蘸スノ硫黄海ヲ控、後ハ白雪皎々トシテ高ク雲ヲ陵ク

ノ由布嶽ヲ負イ四極ノ峻嶺ハ近ク其東南ニ聳ヱ、石垣原ノ旷野遥カニ其西北ニ連山容水ニ入テ、巒影波ニ漂フノ朝ニハ黙想ノ床ニ萬緑ヲ屏息セシメ、水色山ニ映シテ淡霞空ヲ抹スルノタメニハ止観ノ窓ニ一念二千ノ機ヲ顕ハシ、塵寰遠ク隔テノ誼囂到ラス。聞クモノハ只随緑法性ノ松吹ク風ト眞如平等ノ波ノ音ノミ允ニ幽邃閑寂ナル南豊屈指ノ一名刹ナリ。玉潤和尚ハ有徳智誠ノ高僧ニシテ当山再中興ノ祖ト称ス可キ人ナリ。是ヲ以テ檀徒ハ其法系ヲシテ永ク海門寺ニ絶ヱサラシメンコトヲ冀望シ、現代十七世住職ノ如キモ業ヲ玉潤和尚ニ授リタル高弟ノ一人ナリ。

瓜生・久光二島滔没ノ事

昔時別府湾ノ西南隅ニ方リ二個ノ島嶼在リ。其一ヲ瓜生島ト呼ビ、東西壱里南北二十町、今一ヲ久光島ト称ス。大サ瓜生島ノ半ニ過ギズ。二島合シテ一千有餘ノ住民ヲ有シ、四個ノ神祠ト三個ノ寺院ト在シモ、瓜生島ハ慶長元年閏七月十二日、地震海嘯ノタメ久光島ハ同二年七月廿九日、鶴見嶽破裂ノ為メ共ニ崩潰シテ海底ニ滔没シタリ。今一小丘南ノ菡萏港背ニ聳ヘテ以テ青松其上ニ茂生スルモノ、即チ島嶼ノ一部ナリ。二島ノ形状ハ此ニ図スルカ如シ。豊陽故事談ニ云、百六代後陽成天皇ノ御宇慶長元年閏七月大地震ノ為泉泓悉ク潰廃ス。同二年七月又地震海嘯ノ為メ久光島滔没シ、温泉薬師堂皆ナ其所在ヲ失ス。

豊府最要記ニ云、

慶長二年七月廿九日大雨甚因之鶴見嶽東北麓深淵大倍常又山頭崩落埋其深淵過半是ノ故淵水忽溢出成大河急流入巨海時ニ速見郡朝見ノ庄久光村流没　人民死者四十餘人也

一説ニ云、慶長元丙申閏七月十一日十二日大地震山崩水溢瓜生島沈滅　翌二年九月廿五日迄大雨ニテ鶴見嶽東北ノ谷ヨリ水溢出テ近村山里崩ル　此時久光両島共ニ流没ス　城主福原右馬頭入部ヨリ二年　死人七百八人ナリ　云々

要　旨

豊後速見郡別府村曹洞宗宝生山海門寺は、慧明禅師が開山したと伝えられている。この寺はもと久光島にあったし、この島が別府湾の海門の瀬戸にあたっていたので、寺号を久光山といい、海門寺と称せられた。その後慶長二年七月廿九日に鶴見嶽の爆発によって、この島も海底に沈み海門禅寺も藻屑と消えた。

それから九十年ほど経った元禄の初年、雷州禅師がこの地を訪れて、名刹の廃滅を惜しんで里人と謀って白砂青松の海岸に、永平寺を本山とする伽藍を建立して、宝生山海門寺となづけた。雷洲禅師を当寺の中興の祖としている。

元禄五年、雷洲禅師は七か村に虫害が起こり穀物が実らず困窮する村人のために、三日三夜祈祷して豊穣をもたらしたと云われる。飢饉を免れた里人は禅師の高徳を讃え、その報恩として金材を醵出し寺観を整え、年々各戸毎に米壱升を法粮として寄進することになった。安部孫左衛門のように禅師へ、亡父母の菩提の為に寺地を寄進した者もある。

以来、海門禅寺では正・五・九月に先の七か村の里人のために大般若會を修めて、家内長久・子孫繁栄・五穀成就・牛馬安全を祈祷している。また七月には大施餓鬼を執行い、沈没した二島の死亡者をはじめ多くの有縁無縁の精霊の追悼法会を行っている。

現代の堂宇は、中興第十四世玉潤禅師が再興したもので、再中興の祖と称せられている。

寺の南・西側は広大な墓地と松樹について、是永勉氏の「別府今昔」によれば次のように書かれている。

「昭和初めに市側から〝この一角は市有地であるから墓地を移転せよ〟と通告を受けた。びっくりして土地台帳を調べてみると、市側のいうように寺側が登記をしていなかったことがわかり、市の主張どおりに現在の海門寺公園とその周辺にあった墓地を全部野口の墓地に移転した。」

「戦後伐った巨松の切り株の年輪を、根気よく一本一本数えてみたら二八六本あった。宝海山海門寺と改称再建した年代と、この松が植えられた年代とピッタリ一致した。一ぱいきげんで巨松の年輪をていねいに数えた食堂の主人は、歴史考証の上で貴重な証拠を残してくれたわけだ。」

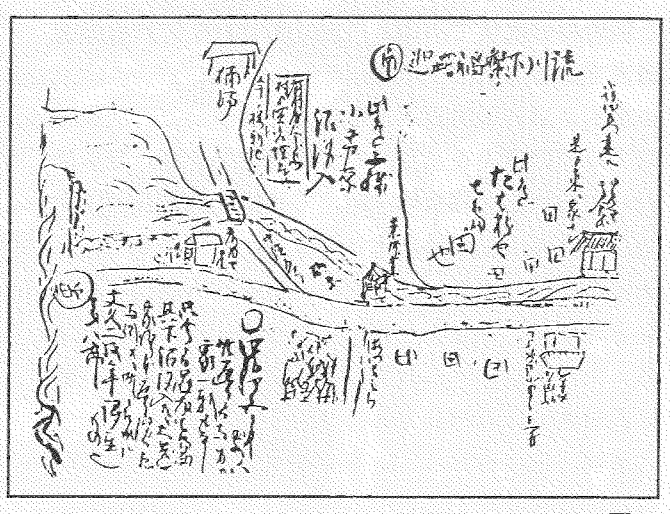
〈参考資料３〉

江戸時代の海門寺界隈

一図は、文久二年に別府村の素封家「たばこ屋」の荒金義八郎が、覚書「諸用留」に四十五六年前の文化・文政時代の淋かった流川下流の有様を思い起して書き残したものである。

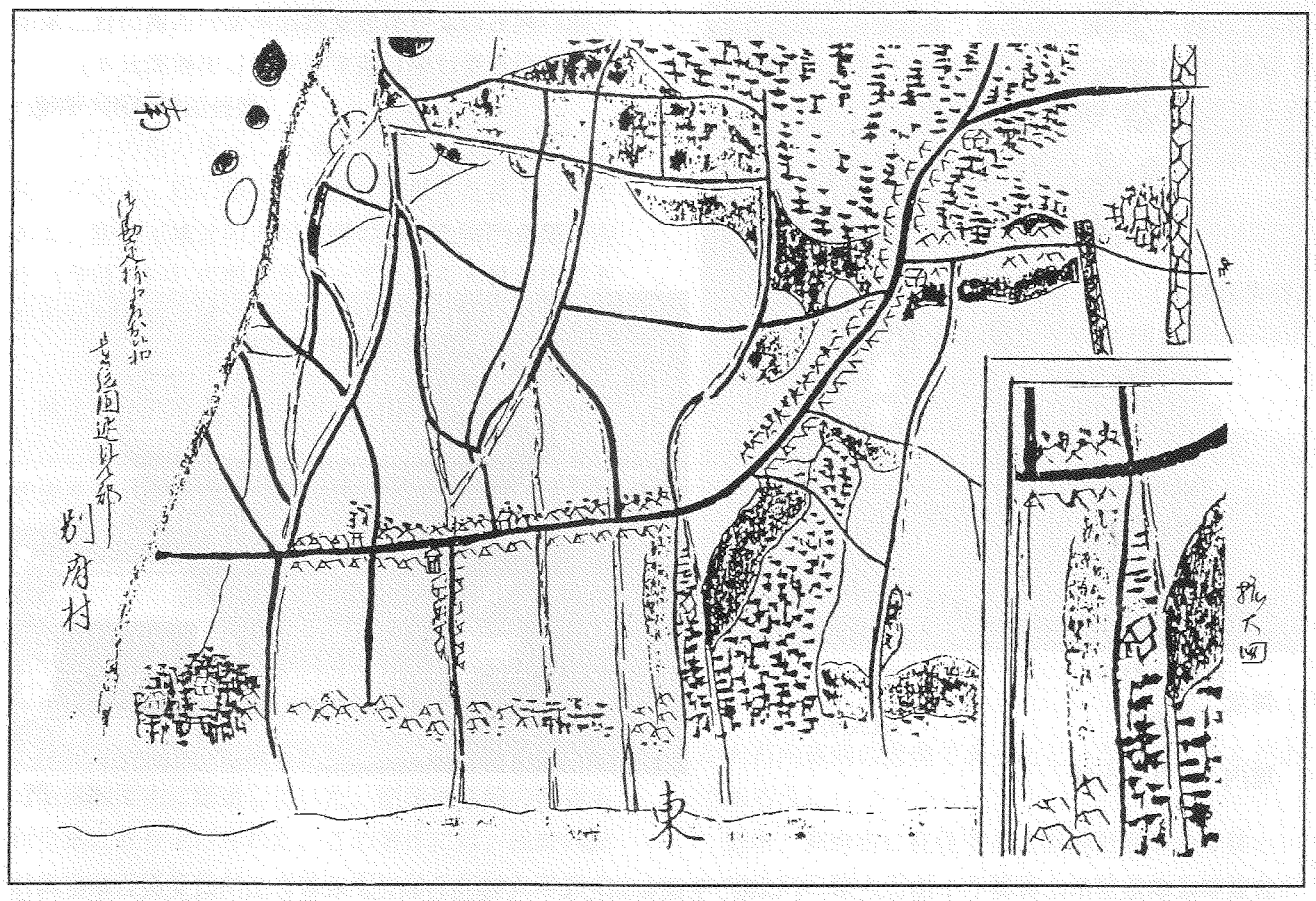
道に沿って流れてきた流川が、薬師堂の所で南に折れて、中浜通りに架かる木橋の下をくぐり海に流れこんでいる。楠湯がポツンとある付近は、「残らず小葦原、沼、汐入」と書かれている。大潮や台風の時にこの辺りまで汐が入ったのであろう。その上手は一面「たばこや」の七島田であった。

ちょうど薬師寺堂と道を隔てて、田圃のなかに「海門寺ミち」と書かれた一本の細道がある。これが、今の銀座裏通りで、妙見山を経て海門寺に辿り着く細道であった。



一図

拡大図



二図

二図は、天保七年江戸の勘定奉行の役人に差し出した別府村の絵図の一部である。

左端の石垣らしいものは境川の堤防で、南石垣村と別府村の大境である。川岸にある神社は野口の天満宮である。

小倉街道は、天満宮の上手で川を徒渉して、別府村に入り村の中央を通り、やがて朝見川を渡って浜脇村へ、それから銭瓶峠を越えて柞原八幡に抜けていた。一番西の三叉路にある日暮庵から、南東にのびる往還にそって野口から南町・立田町へとつづく家並みの中に、西方寺・流川の高札場・秋葉神社見える。南東の端にある松林は松原で、建物は朝見八幡のお旅所や住吉神社であろう。

天明三年（一七八三）、別府村を訪れた古河古松軒は、この道を「ながながしき在町」と「西遊雑記」に書いたのも頷かれる。

その往還が野口を抜けて南に曲る辺りが今の別府駅界隈で、その東の林のなかに一軒ある建物は海門寺であろう（右は拡大図）。流川道から海門寺までは小川が二筋あるが、いちめん田圃である。一図の「海門寺ミち」は描けないほどの小道であったのであろうか。

横灘（別府地方の旧称）の沖で漁をする漁師が、網代とする最も広い瀬を「ビヨンキノセ」といっていた。この瀬の南の端が朝見川の流れこむ沖で、ここを「セノハナ」といい、北の端を「テランオキ」（寺の沖）といった。沖から見える海門寺の松林と大屋根が目印になったのである。

幕末に海門寺は意外なことで名前が出ることになる。

慶応三年、幕府が長州征伐に失敗すると、全九州の幕府領を支配する日田郡代が大混乱に陥り、幕府は豊後の御預所を島原藩から雄藩の肥後藩に預け替えをした。速見・大分・直入郡の幕府領を預かった肥後藩は、警衛の要として別府に藩兵を駐留させる場所を探して、海門寺に白羽の矢を立てた。

「然るところ、御警衛人数出張所は別府の方、然るべく相みえ候につき、同所廻在の節寺院借り受けなどの儀所柄役人どもへ示談におよび候ところ、町際海門寺と申す寺院禅宗にて、間広にもこれある段申し出候につき見分におよび、間配りの儀役々に申し談じ候ところ、二十挺三組は一か寺にて頭とも大略相詰め申すべき見込みにつき、賄いの儀所柄引き受け精々申し談じ候ところ、寺院借り受け賃など一切取り賄い候ものより引き受け、〆て一人前一日三朱あてにて引き受け申し談ずべく申し出候間云々」

（豊後国御預所一件帳）

〈参考資料４〉

海門禅寺　境内散歩

堂宇

本堂	堅九間 横七間三尺	庫裡	百二十坪
衆寮	堅弐間 横五間	鐘楼	堅弐間 横壱間三尺
禅堂	堅弐間 横参間	門	堅弐間 横弐間三尺
境内	六百九十坪		

山　門

旧堂宇は享和二年に火災で全焼したが、その後、玉潤和尚によって建造された。本堂と山門は文久二年に再建されたものである。（別府市誌　昭六〇）。

・しぐれの松（海門寺のクロマツ）

市指定天然記念物

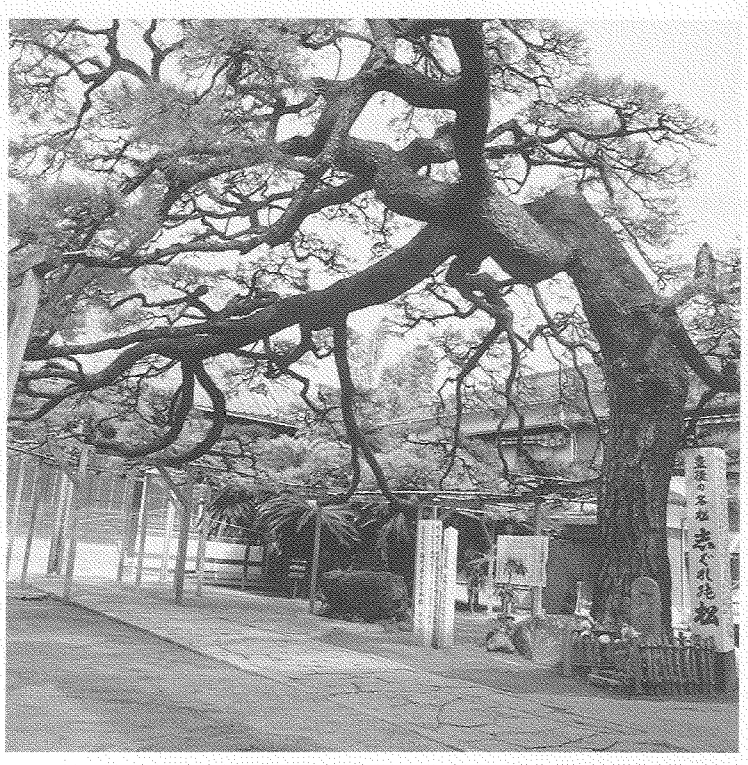
市指定保護樹

海門寺の境内にある由緒のあるクロマツで、庭園樹としてよく手入れが行き届いている。いつの頃からか「しぐれの松」と呼ばれ海門寺とともに歴史を重ねている。

胸高幹囲二百四〇㌢、樹高約六㍍、樹冠東五、六㍍、西一〇、二㍍、南三、〇㍍、北一三、〇㍍

の広がりをもつ大樹で支柱に支えられ保護されている。樹形が整い樹形も優れている。手植えによって育てられた木であるが当地が海岸近くにあって、クロマツの生育地として適地であったうえに、十分な管理がなされた結果、名松に成長したと考えられる。樹齢は分からない。

巨幹の傍らに「作り木の庭をいさめる時雨かな」の芭蕉の句碑が添えられている。



しぐれの松

・林仲介の墓

しぐれの松の根元に、「義士の墓」と云われている墓石がある。松の根元で割腹して果てた武士の墓である。かつて地元の人が、噂のあった南門東側の古松（今はない）の根元を掘ってみたら人骨が出てきたそうである。

郷土史研究家の安部和也氏の論考によると、林仲介は、宝永二年（一七〇五）、山城の国宇治満福寺の添書をもって、持病の筋痛治療のために堀助之丞家（別府村庄屋）を訪ねた。堀家の厚意により温泉治療に専念しながら、請われるままに村人に学問を教え師と仰がれていたが、どうしたわけか割腹自刃して果てた。持物を整理している時「武家不断枕」が発見され、男の素性が摂州住人林仲介と判った。

林仲介の著作「武家不断枕」は、嘉永三年、仲町の油屋順策宅に隠遁していた。肥後藩鶴崎の儒者毛利空桑に取り上げられた。この著作には、浅野内匠頭長矩の刃傷事件が、赤穂の塩に目を付けた幕府の陰謀説が書かれてあったそうである。当地が幕府領であったため公表を憚り、ヤミに葬られたと伝えられている。この内容を漏れ聞いた里人たちが、仲介が大石内蔵助の忠僕であったという虚説を生んだのであろう。

林忠介の墓

近年、別府市に在住する大高源吾直系の子孫といわれる沢田義人氏が、赤穂浪士に縁のある林仲介の墓石を修理して、「しぐれの松」の根元に建てたといわれる。

参考　別府今昔　別府市誌　別府史談

〈執筆者〉 小玉洋美（本文及び参考資料１）
入江秀利（参考資料２・３・４）